

近代和風住宅<高橋萬右衛門家住宅>について

正会員 ○ 麓 和善*
同 平井良直**
同 蔡 軍***

武家住宅 室内意匠 中国趣味 煎茶席

1. はじめに

高橋萬右衛門家住宅は岩手県水沢市大幡小路に位置する。藩政末期、先代萬右衛門(保万)は、伊達家一門の留守家の大番士であったが、維新前後から急速に隆盛し、その子敬章(初代水沢町長)・金治(衆議院議員3期・水沢銀行創設)の代には、胆沢・江刺郡に田畑を有する大地主となった。

主屋は、安政6年(1859)4月14日に作製された家相図(高橋家所蔵)によって、すでにその頃には建設の計画があったことが確認できるが、すぐには実施にいたらず、明治19年から21年にかけて建築本体工事が行なわれ(『本宅造作方日記』高橋家所蔵)、同23年に保万の知己・菅原竹侶の筆になる襖絵が完成した(襖絵款記)。そして、明治26年の陸軍大演習の際には、旅団長伏見宮貞愛親王の宿泊所となった。

本稿は高橋萬右衛門家住宅の平面構成・寸法、および室内意匠について考察し、近代和風住宅としての特質を明らかにするものである。

2. 平面構成・寸法

街路に面した西側に薬医門と土蔵が南北に並び、これらに向かい合って主屋が西面して建つ。主屋は、梁間6間、桁行7間半、入母屋造亜鉛引鉄板葺で、南西隅・北東隅・北西隅に下屋が付属し、北西隅下屋と土蔵の間を、納戸をかねた渡り廊下で接続している〔図1〕。

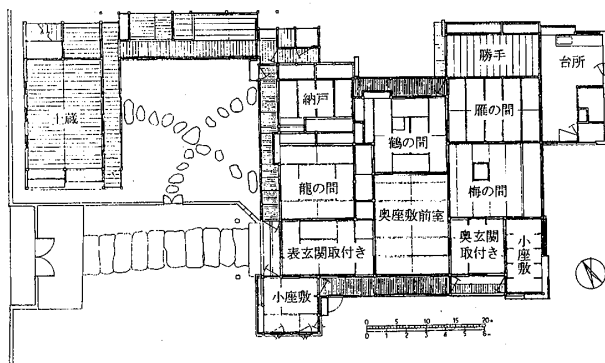
主屋の平面構成は、西面南寄りに唐破風屋根と式台付きの表玄関があり、ここから中に入ると表玄関取付き・表座敷「龍の間」・納戸が南北に並び、さらに表玄関取付きの南西には小座敷が付属する。これら表向き座敷の東には、奥向き座敷である「鶴の間」とその前室が南北に並び、さらにその東には起り破風屋根と式台付きの奥玄関・奥玄関取付き「地図の間」・奥玄関脇小座敷・囲炉裏の間「梅の間」・「雁の間」が南北に並び、「雁の間」の北から東にかけて、勝手と台所が付属する。

平面寸法をみると、柱間は基準寸法6尺3寸の真々制で計画され、柱は、縁側など外周部に3寸8分角、内部に4寸5分角を用いており、いずれも14面取である。

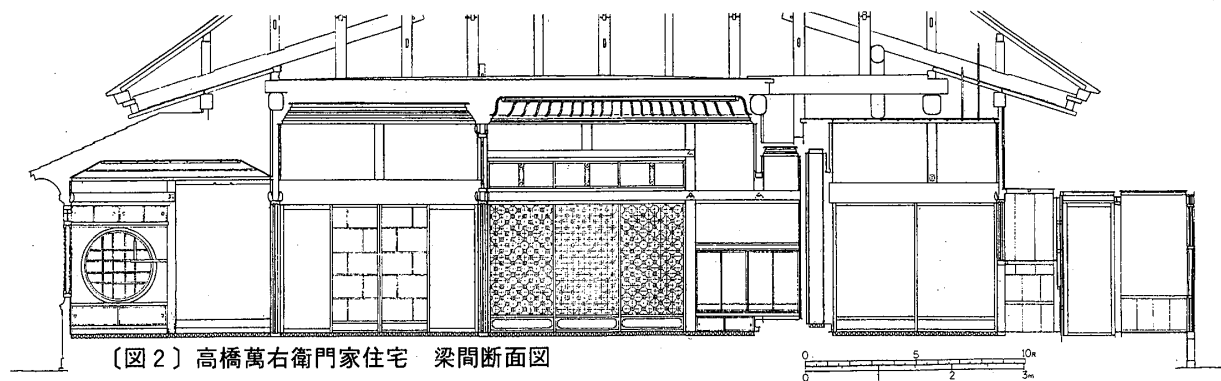
3. 室内意匠

表玄関取付き：式台の付く西面には板戸4枚とその内側にガラス戸2枚、北面「龍の間」境から東面にかけては山水図《蜀山行旅図・海廊観瀑図》の襖8枚、北面「龍の間」境内法上に箴欄間2組、南面東寄りには中央にガラスをはめ込んだ繊細な組子の腰障子3枚、その西には山水図《寒江独釣図》の襖2枚が建て込まれている。そして、長押は杉の磨き丸太、内法上小壁は鮑の貝殻片が散りばめられた黒豆砂利塗で、天井は中国風意匠の繊細な格子の上に桐の天井板が張られている。

表座敷「龍の間」：北面から西面北寄りに床・棚・付書院の座敷飾りが設けられ、付書院の南には中国風意匠



〔図1〕高橋萬右衛門家住宅 平面図



〔図2〕高橋萬右衛門家住宅 梁間断面図

A study on the TAKAHASHI Man-emon family's *kindai-wafu* style house

FUMOTO Kazuyoshi, HIRAI Yoshinao, CHI Jun

の障子3枚とその内法上にガラス欄間、南面から東面にかけては楼閣山水図《輞川図》の襖8枚がパノラマ状に建て込まれている。そして、床柱に白檀、床框に黒檀、長押・落し掛け・床框下蹴込板に檳榔などいわゆる唐木が随所に使用され、壁には螺鈿の材料である鮑の貝殻の碎粒が全面に惜しげもなく塗り付けられている。天井は放射状に支輪を配して折り上げ、《雲龍図》の貼付鏡天井となっている。以上、書院造を基本としながらも中国風意匠・材料で装飾された最も格式の高い部屋である。

小座敷：西面北寄りに床、その南にガラスの大円窓をもつ棚が設けられ、南面にはガラス窓2カ所、東面南寄りにはガラス窓1ヶ所、その北の廊下境に板扉1枚、北面東寄りには山水図の押絵貼襖2枚、その西には板扉1枚が建て込まれている。そして、床柱と長押に杉の磨き丸太、床框下蹴込板に棕櫚が使用され、壁は鮑の貝殻の細粒が混入された砂壁である。天井は四周に勾配のある小天井を配した竿縁天井で、天井板は桐である。なお、現状は畳敷であるが、床組は後補で、床下には漆喰叩きの土間があるので、当初は土間である可能性が高い。以上、本室の室内意匠は、煎茶席に極めて近いといえる。

奥座敷前室：西面には花鳥図《四時春風図》の襖6枚が建て込まれ、北端内法上には中国風意匠の繊細な格子の神棚がある。南面には玄関取付き南面と一連のガラス入り腰障子4枚、その内法上にはガラス欄間2枚、東面には花鳥図《秋圃老容図》の襖5枚半(北端の襖の中央に隣室境間仕切があるので、南半だけが見える)、北面には中央に障子がはめ込まれた襖4枚、その内法上には老松の漆絵が描かれたガラス欄間が2組建て込まれている。そして、長押に杉の磨き丸太が使用され、壁は黒豆砂利塗で、天井は杉の鏡板が板違いに張られた格天井である。

奥座敷「鶴の間」：西面北寄りには床・棚、その南には花鳥図の襖2枚、北面西寄りには付書院、その東には腰板に草花図の描かれた腰障子4枚、東面には花鳥図の襖3枚半(南端の襖の中央に隣室境間仕切があるので、北半だけが見える)、南面奥座敷前室境には障子入襖4枚、その内法上には漆絵ガラス欄間が2組建て込まれている。そして、床柱に杉丸太の曲木、長押に杉の磨き丸太を使用し、壁は小座敷と同じ鮑の貝殻の細粒が混入された砂壁で、天井は奥座敷前室と同じ板違天井である。

囲炉裏の間「梅の間」：東面には腰板付きガラス戸が4枚建て込まれ、勝手口となっている。南面には腰高さにガラスがはめ込まれた板戸5枚、西面には板戸4枚が建て込まれ、これら9枚の板戸には幅広の桐が使用され、豪快な老梅図がパノラマ状に描かれている。北面には腰高さにガラスがはめ込まれ、その上下には幅広の樺に溜

塗の板戸4枚が建て込まれている。天井は竿縁天井であるが、囲炉裏の上方半間四方は一段高くして格天井とし、側面に通気孔を設けている。

「雁の間」：囲炉裏の間境である南面にはガラス入り溜塗板戸4枚、西面には南寄りの奥座敷境に板戸2枚、その北の廊下境にガラス入り板扉1枚、北面から東面にかけては腰高さにガラスがはめ込まれた板戸9枚が建て込まれている。そして、この西面の板戸2枚から北・東面のガラス入り板戸9枚にかけては幅広の桐が使用され、躍動感のある蘆雁図がパノラマ状に描かれている。内法より上から天井にかけては、近年付加された新建材が張られている。

4. むすびー近代和風住宅としての特質

平面構成は、西側を表向き、東側を奥向きとし、藩政期の武家住宅にならって、部屋の格式に序列を作っているが、表座敷「龍の間」・小座敷・奥座敷「鶴の間」と、座敷飾りのある部屋が3室あり、さらに表玄関取付きと奥座敷前室境の襖を撤去すると、地袋・天袋を備えた半間四方の棚が現れ、L字型の座敷になるなど、装飾性の高い座敷を多く設けている。

最も格式の高い表座敷「龍の間」において随所に使用された唐木は、幕末から明治・大正期に流行した煎茶席において好んで使用されたが、なかでも檳榔は、加賀前田家の工芸の粋を集成した「百工比照」に収められているものの、建築部材としてこれほど大々的に使った例は見当たらない。また、鮑の貝殻の碎粒を全面に塗り付けた壁も、彫刻家であり煎茶にも親しんだ朝倉文夫が、昭和10年に東京に建てた自邸(現朝倉彫塑館)「朝陽の間」の壁に赤瑪瑙の碎粒を全面に塗り付けた例をかるうじて類例として見出すことができるが、やはり極めて珍しいといえる。壁仕上げについては、この表座敷「龍の間」の鮑碎粒塗を最上級とし、表玄関取付きの螺鈿散黒豆砂利塗、小座敷および奥座敷「鶴の間」の鮑細粒混砂塗、奥座敷前室他の黒豆砂利塗の順に、部屋の格式に応じて塗り分けられている。

加えて、玄関脇の小座敷の室内意匠は、煎茶席に極めて近く、菅原竹侶によって描かれた中国文人趣味溢れる障壁画群とあわせて、当時流行していた煎茶席意匠および中国趣味を、建物全体にわたって随所に見出すことができる。

以上、高橋萬右衛門家住宅は、武家住宅の平面構成に倣いながらも、中国趣味を基調とした高価な材料と障壁画による優れた室内意匠を持ち、かつ東北地方にまで煎茶席の影響を確認することができる極めて貴重な近代和風住宅であるといえよう。

* 名古屋工業大学社会開発工学科 助教授・工博

** 相模女子大学 講師・文修

*** 日本学術振興会 工博

Assoc. Prof., Nagoya Inst. of Technology, Dr. Eng.
Lect., Sagami Women's Univ., M.A.
Japan Society for the Promotion of Science, Dr. Eng.